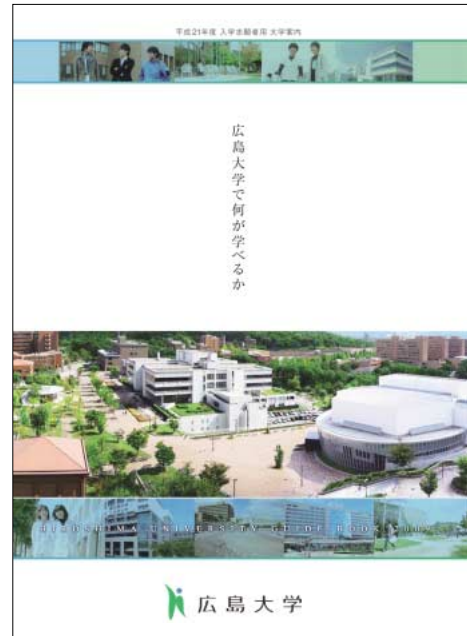




かけはし

広島大学入学センター年報（第7号）

KAKEHASHI



目次

巻頭言 秋季入学 大学教育への柔軟なアクセス

1. 特集 秋季入学を考える

はじめに

《国外調査》

- a. ニュージーランド
- b. シンガポール
- c. 内モンゴル自治区
- d. ベトナム

2. 地域オフィス活動 地域オフィスの活動状況について

3. 入学センター学生スタッフ活動

はじめに

僕は広大生 ~ 当たり前のことを再認識した1年間 ~

入学センター学生スタッフの活動を通じて高校生に伝えたいこと

入学センター活動レポート

入学センタースタッフ紹介・編集後記

杉原 敏彦 2

永田 純一 3

杉原 敏彦・高地 秀明 4

永田 純一 7

高谷 紀夫 9

浮田 三郎 11

上田才節雄 13

永田 純一 14

山谷 義貴 15

森 玲薫 16

..... 17

..... 18

巻頭言

秋季入学 大学教育への柔軟なアクセス

入学センター長 杉原 敏彦

「かけはし」本号は、特集として秋季入学を取りあげる。秋季入学をめぐる議論の基調は、言うまでもなく国際化への対応。入学時期が秋季である世界の主な国々の大学（学校）との人的移動や交流を円滑に進めるためには、我が国の大学についても入学時期を秋季に揃える方が良いとの意見である。

近年では、ボランティア活動をはじめ多様な体験活動の機会を若者に与えるため、高校卒業と大学入学との間に一定の期間、いわゆるギャップ・タイム（イヤー）を設けてはどうかとの観点が議論に加わった。

ここで、あらためて、秋季入学を論ずる観点を確認しておきたい。

大学教育へのアクセスがユニバーサル化していくことは世の流れである。大学入学・修学の仕組みが柔軟になり、人々が学びたいときに学ぶことのできる柔軟なシステムが導入されることは基本的には望ましいことである。秋季入学、早期入学、デュアル・ディグリー、早期履修等の制度は、このようなニーズに対応している。個人は本来バリエーション豊かな存在である。学びへの要望のバリエーションも然り。個人々々の学びへの要望が制度の壁によって塞がれることは、避けられるものならばそれにこしたことはない。秋季入学他の入学・修学に関する制度は、学びに関する個人の多様な要望を可能にするためのツールとも言える。

しかし、これらの制度の導入は、制度運営という観点から見ると、大学の負担の増加に直接結びついている。コスト・パフォーマンスの問題である。柔軟な制度が個人にもたらす幸福と、制度運営上の負担とのバランスを考慮しながら導入を検討する必要があるだろう。

歴史を振り返れば、概ね明治の前半までは、少なくとも中等教育以上の学校の学年は9月始まりであった。それが、明治中頃になると、高等師範学校、次いで尋常師範学校が4月始まりに切り替わり、小学校、中学校、高等女学校が後に続いた。学年始期が9月から4月に変更された要因としては、会計年度との一致の必要性及び徴兵制度の影響^(注)が最も大きいとされる。つまり、明治後半における各種の学校の学年始期の選択は、教育論というよりも国の制度との整合を図る観点から決定されたと見ることができる。

翻って今日、秋季入学の制度を検討するに当たっては、個人をバリエーションのあるものと捉え、大学教育への柔軟なアクセスを望む学び手の観点からの議論も加えるべきであろう。

(注) 徴兵令による壮丁の届出期限が9月から4月に変更されたため、9月入学のままでは、入学志願者が4月のうちに徴兵されるおそれが生じた。学年始期の歴史的な変遷については、寺崎昌男『プロムナード東京大学史』を参考にした。

はじめに

永田 純一

広島大学では、今年、秋季入学に関する検討部会として高谷副理事を座長とする「秋季入学検討WG」を設置し、国内外の調査、導入する際の問題点や課題の検討を行った。秋季入学を早期に導入するための検討というよりも、秋季入学の問題点を明らかにし、現在の高等教育の在り方などについて広く検討を行うことをその主眼としている。秋季入学を取り巻く現状について、以下にまとめてみたい。

今日の高等教育における世界標準のキーワードに「教育のグローバル化」がある。以前にもまして、他国間の人的移動と情報の流通が活発になり、さらに同時性がたかまった。以前ならば国外の最新の研究成果を読むために、一か月待った論文が、今では自分の部屋にいながらして、刊行と同時に世界中の同分野の研究者とともに読むことが可能である。

高等教育にも市場というキーワードが出現し、メディアでは、高等教育機関の格付けに相当するいわゆる大学ランキングの公表が始まった。OECD調査官が、近年大学ランキングのもたらす各国高等教育機関への影響を調査し、現状報告とその問題点の指摘を行っている。その一方、高等教育機関をどのような観点により評価するのは、非常に難しい問題であり、前述の大学ランキングでも、その評価項目にはさまざまな議論がある。特に、教育に関する評価は非常に難しく、どのようなものを量的に評価し、また質的な評価をどのように行うか、について多くの議論がなされている。

このような状況のなか、我が国では以前にもまして、国内の高等教育機関のもつ国際競争力に対する評価が厳しいものになりつつある。1980年代後半に、臨時教育審議会からの依頼により秋季入学に関する調査を行った秋季入学研究会からは、一冊のまとまった報告書が公表されている。高等教育機関のさまざまな活動は、教育も含めてそのパフォーマンスの評価がなされようとしており、グローバル化した状況においては、容易に多国籍間における比較を可能にする。

秋季入学導入の発端は、そもそも国際的な人（教員、学生）の流動性を高めたい、というものであったが、国内の社会情勢から、その後、青少年育成のために奉仕活動に従事させる、といったギャップイヤーの活用を含むものとなった。臨時教育審議会、教育国民会議、教育再生会議、と政府関連の場において長く議論されてきたテーマであるが、本学においてはWGメンバーを中心に、国内と国外の大学における「国際化」と「ギャップイヤー」に関する調査を実施した。調査結果の詳細は、WGによる報告書「広島大学における秋季入学制度に関する調査報告書」にまとめられている。以下の節に本学で実施した国外調査で得られた国外の状況を紹介したい。

《大学等の入学時期変遷》

- ・明治5年 学制発布
高等教育機関は4月や9月など機関により異なる入学時期
- ・明治20年
高等師範学校が4月入学制を実施
- ・明治34年
中学校と高等女学校が4月入学制となる
- ・大正8年
高等学校が4月入学制となる
- ・大正10年
高等学校に加え、大学等も4月入学制へ移行
- ・昭和22年
学校教育法の制定。すべての学校で4月入学制
- ・昭和51年
学年途中の入学を認める
- ・平成11年
秋季入学に柔軟に対応
- ・平成19年
学年の始期及び終期を学長が定めることができるよう学校教育法を改正

国外調査 a. ニュージーランド

杉原 敏彦, 高地 秀明

1. 訪問調査の概要

昨年(2008年)12月、秋季入学にかかわる海外調査の一環として、ニュージーランドの高等教育機関等(注1)の訪問調査を行った。調査対象としてニュージーランドを選んだのは、この国の高等教育機関は入学時期を年2回設けており、我が国で秋季入学を導入する場合のモデルとなるのではないかと考えたからである。訪問したのは、オークランド大学(注2)、ヴィクトリア大学、ユニテク、マウント・ロスキル高校及び在ニュージーランド日本国大使館の5機関である。

この度の訪問調査の目的と内容は多岐にわたるが、本稿では、ニュージーランドの高等教育機関で二つの入学時期が用意されている意味と高校と大学の接続の状況を中心に報告する。

2. ニュージーランドにおける大学入学の仕組みと学生募集の仕組み

(1) 大学入学の仕組み(流れ)

ニュージーランドでは、大学入学の仕組みを含めて教育改革が進行中である。以前(2001年度まで)は、高校最終学年に「パーサリー(大学奨学金資格) Bursaries」と呼ばれる国内の統一試験を受験し、一定の成績を修めることが大学入学には必要であった。

しかし、2002年以降、中等教育レベルの修了証としてNCEA: National Certificate of Educational Achievementが段階的に導入され、現在ではこのNCEAに切り替わっている。高校生は、Year11~13でNCEAのレベル1~3を受験する。その単位取得状況によって、大学入学資格が得られる。

NCEAの制度の下では、大学入学資格は幅広い複数の教科の単位修得によって取得可能であるが、学部・学科によっては、入学に必要な教科・科目を大学が指定する場合がある。たとえば、工学部の場合は、数学の微積分及び物理から最低18単位取得すること、看護学部の場合、生物、化学及び物理のいずれか1分野から最低16単位取得することなどの指定がある。

学部・学科によっては、志願者が集中して選抜

状態になるところがある。たとえば、人気のあるオークランド大学経営学部では、募集人員100人のところにトップの成績(Aクラス)の者が集中し、その結果AマイナスやBクラスの成績の人は他の学部に戻ってもらうということがある。

国立大学への出願時期は11月の終わりから5月の終わりである。高校生は複数の大学に出願し、合格することもできるが、入学金納付期限までには、必ず一つの大学に決める必要があり、その後の変更はできない。

(2) 学生募集の仕組み

ニュージーランドでは、地元志向が強いため、大学進学希望者は地元の大学に進学することが多い。また、大学ごとに学部構成に特色があるため、法人化前までは大学間に特段の格差はなかった。しかし、最近では、学生の獲得や大学の経営収支に直結するため、大学間で格差をつけたがる傾向が生まれている。

というのは、大学は、学生が支払う授業料の他、ニュージーランド政府から受け取る補助金を基に運営される。この政府からの補助金は、ニュージーランド国内の学生を対象としてそれぞれの学生の授業取得量を用いた計算方法で算出されるからである(より多くのフルタイム学生を受け入れた方が補助金の額が多い。また、留学生でも大学院博士課程の学生は、国内の学生の数に含まれる。)

このような背景もあって、大学では、近年、高校を回って説明会を開いたり、オープンキャンパス等学生確保のための行事を行ったりしている。特に高校での説明会は頻繁





に開催されており、主な参加者であるYear13の高校生にとって、大学を理解し選択をする上で良い機会となっている。

3. 二つの入学時期

ニュージーランドの高等教育機関では2学期制が一般的であるが、第1セメスター（3月開始）と第2セメスター（7月開始）の開始時期に合わせて、大学には2月と7月の2回入学時期がある。^(注3) 入学者数の割合は、オークランド大学の場合、2月入学が約70%、7月入学が約30%である。入学時期を2回設定した起源、理由は訪問インタビューからは探ることができなかったが、7月入学は、北アメリカ・ヨーロッパ・日本など北半球からの入学者にとって、自国の卒業時期との関係で都合が良いと考えられている。

カリキュラムの面では、二つの入学時期の入学者に対して二つのカリキュラムを用意するものではない。授業についても、一つの授業を異なる入学時期の学生が入り混じって受講する。したがって、二つの入学時期を設けることによって、大学（教員）の負担が増すものではない（このような対応が可能となる背景には、完全なセメスター制が実施されていることが挙げられる。）

卒業時期は、9月と5月の2回ある。社会の学生受入れ（就職）に関しては、7月入学者が不利ということにはならない。ニュージーランドの場合、夏休みが約3か月（11月末から2月末）あるが、この期間中にサマースクールというプログラム（集中講義）があり、このサマースクールを利用して7月入学者が「遅れた」分を取り戻すことが可能であるから。^(注4) 7月入学は、2月入学よりも半年遅れているように思われるが、受け取りようによっては、半年進んでいるとも考えられる。

4. ニュージーランドの初等中等教育

(1) ニュージーランドの初等中等教育

ニュージーランドの初等中等教育は5歳から10

歳までの初等学校（6年間）、11、12歳の中間学校（2年間）及び13歳以降の中等学校（5年間）と経るのが一般的であり、高等教育以前の修業年限は13年である（Year 1からYear 13まで）。また、ニュージーランドでは、1996年以降4学期制が採用されている。1学期は1月終わりから4月中旬、2学期が4月終わりから7月初め、3学期が7月中旬から9月終わり、4学期が10月中旬から12月初め又は中旬までである（10週授業を行い、2週休みのサイクル）。

(2) NCEA - 高校から見た大学進学の仕事

NCEAの制度の下では、大学入学資格を含む諸資格は、幅広い複数の教科の単位修得の組合せで取得可能となる。

単位の修得は、各高校における校内試験/ポートフォリオ提出評価及び全国一斉の学外共通試験によって認定される。成績には、単元基準と達成基準の2種類があり、後者は3段階（卓越、優秀、達成）で評価される。多くの生徒の場合、Year11でレベル1から始めるが、興味・関心と習熟に応じてさらに先のレベルの受験も可能である。

NCEAに対する肯定的評価の主なものは次のとおり；パーサリーの制度下では、合格が不合格かのいずれかしかなく、50点の合格点に1点でも足りなければ不合格となり、49点分の学修は評価されなかった。また、学修が大学進学のための教科に偏りがちでもあった。しかし、NCEAの下では、評価を受ける科目の幅が広がり、アチーブメントの細分化により、達成できる領域が広がった。

一方で、NCEAに対する否定的評価の主なものは次のとおり；NCEAでは、フォーカスの幅が狭く、学びが細分化しているため、全人的・全体的な理解という観点が欠けてしまう。また、生徒の中に、安易な科目選択をする者が出てきている。さらに、教員にとっては、成績評価が多く、負担が大きくなりすぎている。



(3) 高校から見た二つの入学時期

高校生は12月に卒業して、2月に大学へ入学するのが一般的である。7月入学については、この時期に入学する国内の高校生は少数である。ただし、数か月間ヨーロッパなど海外で過ごした後に入学する場合や社会人の入学の場合などではニーズがある。

5. 二つの入学時期のまとめ

我が国で秋季入学を実施する場合、大学全体で一斉に入学時期を秋季に移動することは極めて困難であり、入学時期を年2回(4月と秋季)設定するという対応が現実的である。この点で、2月と7月の2回入学時期を設けているニュージーランドの大学は大変参考になる。

調査を通じて、ニュージーランドの場合、2回の入学時期の入学者の割合は概ね7対3であり、入学者の少ない方の入学時期(7月)の入学者は、主に北半球からの入学、留学生、数か月間海外体験を行った国内の者などが対象となっていることが分かった。

ニュージーランドにおいて、このような2回の入学時期をもつ制度が実体を伴って円滑に実施されている背景・要因としては、次のことが挙げられる。

大学入学が、入学時の選抜試験によるのではなく、高校教育における学修の成果を認証するという評価制度に基づいて行なわれている。したがって、志願者の入学準備の方法・負担は入学時期の別なくほぼ同一であり、志願者はそのニーズに応じて入学時期を選択することが可能である。

大学入学後の学修内容、学修方法は入学時期によって異なるのではなく、同じ内容を学修することができる(セメスター制の実施・徹底、柔軟なプログラムの実施)。この点は、志願者にとって大きなメリットであると同時に、大学側にとっても入学時期の2回実施に伴う負担は新たに生じないことを意味する。

遅い方の時期(7月)に入学した学生に対して、追加的な学修機会が用意されていて(サマースクール、サマーセメスター等)、履修の仕方によっては早い方の時期(2月)に入学した学生と同時期に卒業することが可能である。

7月入学の主な対象者である留学生につい

ては、国の政策及び各大学の経営戦略として積極的に受け入れが図られている。同時に、多様な経歴を有する学生を大学が受け入れる風土・環境が成熟している。

上記4点の中には、国レベルの制度整備を必要とし、一大学の取組みでは対応できない事項も含まれているが、大学として積極的に導入・改善すべき点もあり、そうした改革を通じて、帰国生を含む海外からの入学、留学生及び主体的な秋季入学選択者の増加が実現し、大学の一層の活性化にも結びつくものと考えられる。

(注1) ニュージーランドの高等教育機関は、大学、ポリテクニク(一般教養、職業訓練及び専門教育を行う高等教育機関)、教育カレッジ(初等中等教育教員を養成するための教育機関)、ワナunga(マオリの文化・伝統を学ぶための教育機関)及び私立高等教育機関の5つに分類できる。

(注2) 大学の設置形態はいずれも国立であり、オタゴ大学、カンタベリー大学、オークランド大学、ヴィクトリア大学、マッセイ大学、ワイカト大学、リンカーン大学及びオークランド工科大学の8大学がある。

(注3) ニュージーランドの大学の学年暦として、オークランド大学の例(2009年)を示す。

・サマースクール(Summer School)

1月6日～2月18日

(この間の2月16日～18日は試験)

・第1セメスター(Semester One)

3月2日～6月29日

(この間の6月6日～29日は試験)

(セメスター間休暇 6月30日～7月18日)

・第2セメスター(Semester Two)

7月20日～11月16日

(この間の10月24日～11月16日は試験)

(注4) 一部の大学(たとえばウェリントン大学等)では、トリメスター制(3学期制)を実施していて、学期は、第1トリメスター(3月～6月)、第2トリメスター(7月～10月)及びサマートリメスター(夏学期、11月～2月)からなる。このうち、サマートリメスターは、第1、2トリメスターで単位を取得できなかった授業を再度選択したり、短期間で大学を卒業したい学生が授業を受けたりすることが多い。



国外調査 b. シンガポール

永田 純一

4つの公用語（マレー語、中国語、タミル語、英語）を持ち、国語はマレー語、学校教育では、母語と英語の2言語教育が実施されているシンガポールにおいて、大学における国際化はどのようになされているのであろうか。秋季入学との関連について調査するため、今回、2つの大学と日本大使館を訪問した。本稿では、シンガポールの高等教育の概要と訪問先で得られた国際化戦略の一部を紹介したい。

（1）シンガポールの大学入学試験

シンガポールの大学では、大学独自の入試（examination）は実施されず、シンガポール・ケンブリッジ教育認定試験（Singapore-Cambridge General Certificate of Education（GCE））の成績により入学者選抜（selection）を実施している。いくつかのレベルのうち、特に、Aレベル（Advanced Level）の成績が必要であり、調査に協力してくれた訪問先の職員によれば、難易度は相当高いものである。さらに近年、GCEの成績に加え、高等学校で開設されているプロジェクトワーク（Project Work）の成績が入学者選抜資料として利用されている。プロジェクトワークとは、グループ学習の一種で、あるプロジェクトを学生間で協調しながらやり遂げるもので、暗記学習に対する批判が起きた後、このような取り組みが始められている。

（2）大学の国際化戦略

今回訪問した大学は、南洋工科大学（NTU：Nanyang Technological University）とシンガポール国立大学（NUS：National University of Singapore）である。いずれも学生数3万人程度（大学院生と学部生合わせて）の大規模大学である。南洋工科大学では、特に留学希望者の多い中国、ベトナム、マレーシア、インドそしてインドネシアの5カ国に絞って、国際化戦略を強化している。留学生に対する選

抜は、出身国での大学入学資格検定試験の成績を利用しているが、一部の国からの留学生に対しては入試が実施されていた。一方、NUSは、シンガポールの高等教育をリードしている感があり、留学生対策においても、世界を各地域に分け、それぞれの地域担当部署が地域ごとに対応している。対照的にNTUは、全ての地域というより、特定の地域にターゲットを絞った戦略である印象を受けた。工学系大学として、特に工業に力をいれている国からの留学生が必然的に増加し、大学としても力を入れる結果となっている。

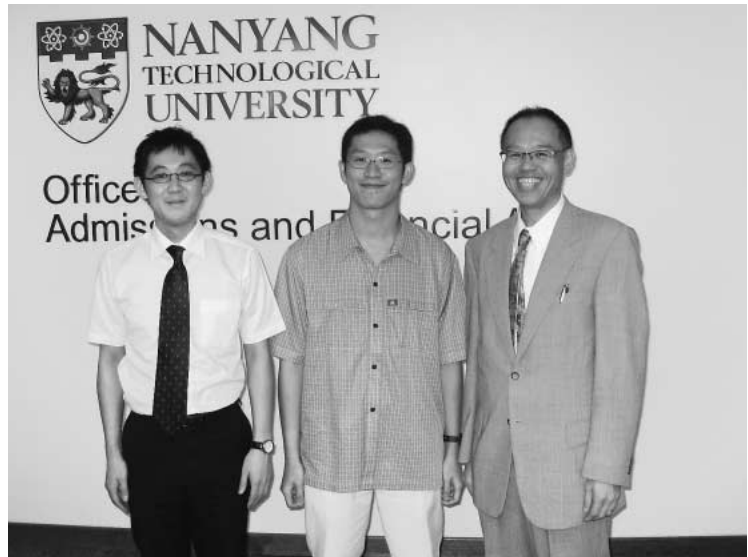
（3）入学時期について

そもそもシンガポール国内において、高等学校の卒業時期である12月と大学の入学時期である7、8月とはずれがあり、学生はその期間さまざまなことに取り組むそうである。また、本学との交換留学制度があるNTUからの留学生は、例年10月の後期授業から本学の授業に参加している。また、シンガポール国内の高校生にとっては、英国のケンブリッジや米国の著名な大学をまず第一志望として目指しており、日本へは、日本語を勉強したい学生が来る、という場合が多い。この観点から考えれば、現在の日本における4月入学の場合、本学へ入学する前の数か月間、学生は日本



語の学習期間として利用することが可能であり、そのことが入学後の学習上プラスに寄与すると考えられる。秋季入学を導入すれば、シンガポールの高校生が本学に入学する場合、1～8月（または9月）のように長い期間の入学前のずれ（ギャップ）が生じることとなり、現状の4月入学におけるずれ（1～3月）よりも大きなものとなる。同行してくれたシンガポール国立大学の学生の話では、大学入学までのずれ（ギャップ）について、それほど特別に考えてはならず、むしろ留学準備ができてよいのではないか、という意見であった。これは訪問先のシンガポール国立大学日本学研究科の教員も同様の意見である。

したがって、日本の大学における留学生受け入れを考えた場合、日本語を勉強する学生を対象とするのであれば、現状の春季（4月）入学を利用して、入学前に日本語能力育成期間を設けることが良いシステムであるとも考えられる。一方、欧米からの留学生を対象とした英語による授業カリキュラムを整備し、高校卒業生のみならず、広く国外の大学生や教職員の移動の流動性を高めるのであれば、秋季入学導入のメリットはあると考えられる。



（おわりに）

シンガポールでは、現在4つ目の大学設置が進行中である。「世界の優秀な学生が集う国際学術都市にする」という国家ビジョンとしての“東洋のボストン”構想を重要課題としており、今後、高等教育機関で学ぶ学生数の増加が見込まれる。大学単独で行動しているというよりは、国の大きな政策の枠組み、方向性がある。この政策からは、自国の人材を教育するだけでなく、優秀な留学生を獲得し、その学生等をもシンガポールの資源として、シンガポールの発展に寄与させたい、という意図が読み取れる。わかりやすい例として、シンガポール政府の奨学金を受給し、シンガポールにきた留学生が一定期間、シンガポール国内で働かなければならないことや、政府の奨学金で海外へ留学したシンガポールの学生が一定期間、政府機関で仕事をしなければならないこと等がある。

日本大使館領事部においても、就職支援のactivityなどが留学生にはアピールするのではないかと、という指摘を受けた。留学生に対する大学が行う支援の中で、卒業後のキャリアパス支援は非常に重要なテーマの一つである。

以上から、秋季入学、あるいは留学生獲得の施策として、特定の地域に絞った留学生獲得対策とそれに応じた支援システム、卒業後のキャリアパスの確保などが、重要な課題であると思われる。



国外調査 c. 内モンゴル自治区*

副理事(入試改革担当) 高谷 紀夫

*「広島大学における秋季入学制度に関する調査報告書」からの抜粋

【調査日程】2008年11月11日～16日

【視察先】中華人民共和国内モンゴル大学(内モンゴル自治区呼和浩特市)

《全体意見交換(11月12日)》

内モンゴル大学は1957年の創立、1978年に中国国家重点大学のひとつとして認定され、また1997年には全国重点建設発展のための“211計画(project)”100大学のひとつとなっている。2004年からは、中国政府教育省と内モンゴル自治区人民政府共同運営形態を採っている。学部生・大学院生を含め学生数23,458名、教員数合計2,429名、15学院(College)、34学部(Department)、1一般教育機関より構成される内モンゴル自治区最高の総合高等教育機関である(『パンフレット内モンゴル大学』より)。研究状況としては地理的文化的背景から「モンゴル学」そして最近は「生命科学」が重要分野として活躍している。

同大学国際交流の拠点として位置づけられているのが「国際合作・交流処(Institute of International Cooperation and Exchanges)」である。同組織は、専任教員3名で運営されている。同教員に授業担当の義務はない。現在20以上の海外大学と交流協定を締結している(内モンゴル大学50周年記念出版物より)。同大学在籍中の留学生数は約3-400名で、その受入組織となっているのが「国際教育学院(College of International Education)」で、専任教員4名、職員6名、非常勤職員20名程度。日本語教育の拠点は、外国語学院(College of Foreign Languages)日本語学科で、教員数25名(その内、日本人が5-6名含まれる)、学部段階学生数約500名。内モンゴル大学内学院で最高の100%の就職率をマークし、全国約400を数える日本語学科ランキングで10位という実績を誇る。就職先は中国南部の日系企業と聞く。日本との国際交流に関する問題点として、(1)交流の“項目”(分野・内容)が少ない、(2)アメリ

カの大学と協定を結んで実施している2年+2年=計4年でのB.A./B.Sc、1年+1年=計2年でのM.A./M.Scのようなカリキュラムが欲しい、(3)孔子学院が少ない、特に日本の国立大学で少ない、の三点を指摘された。

《外国語学院・国際教育学院での意見交換(11月13日)》

2001年より“モンゴル班”としてモンゴル族対象の1クラス設置。全体でのモンゴル族の割合は、三分の一程度。前日の情報提供のように、就職率100%を誇り、留学経験者も多いという。その理由は、(1)経済的理由:アメリカ留学(たとえばハーバード大学)だと40万元/年に対し、日本留学だと20-30万元程度、(2)日本文化への親近感(責任感・仕事優先など厳しく教育される)、(3)民族間の距離が近い、という三点が挙げられる。なお、現時点で把握している限り、広島大学への内モンゴル大学出身者は2名、内モンゴル自治区出身者は17名である。

参観した授業の内容は、就職活動での電話による応募申請を課題とする実践的授業であった。全体のカリキュラムが不明だが、授業参観後、100単位を越える現状では不足でさらに増やしたいと主任教授は述べていた。



国際教育学院は、1999年に正式に内モンゴル大学に付設された外国人留学生向け中国語、モンゴル語を学ぶための教育機関である。歴史は、1980年代末まで遡り、モンゴル研究・モンゴル語研究希望者対応が初期の状況であった。現在留学生数は3-400名。キャンパス内に設置された施設は、教室と宿舎を兼ねている（経費に関しては提供パンフレット参照）。最も多い留学生はモンゴル国からで割合は70%を占める。他に日本、韓国等12ヶ国から。40%が学位取得希望者、60%が学士学位段階。去年は前年比で52%人数が増加した。今後の方針としては受入拡大を予定している。同学院は全学に開かれており、HSK（漢語考試）で一定の成績を修めた学生あるいは一定の基礎能力を有する留学生は、本科生として学ぶことも可能である。

日本からの留学生は年平均で15-20名程度。現在の構成は、中国語専攻6名、モンゴル語専攻3名、学部生4名、修士課程2名（数字の不一致は未確認）。日本人留学生には、日本語ができる先生が支援するサービスもある。留学生向けの授業は、1クラス15-20名だが、人数規模から日本人向けに1クラス設定している。参考に、韓国人留学生は2-3名なので合同クラス。さらにまた留学生のための特別授業の支援も実施している。日本からは過去全て私費留学生だったが、今年受入れた東京外国語大学出身の修士課程在籍者には、初めて学費免除に加えて中国政府より170元/月が支給されている（初めてのケースで他日本人留学生から問い合わせが院長に殺到したという）。この枠は、中国政府より内モンゴル大学に対し、年1-3名認められている。全体として応募者は多いが、生活費、学費等の経済的問題がある。その意味で中国政府からの財政的支援は重要。その申請用紙は、中国在外領事館のWEBからダウンロードできる。全国で89名の枠。内モンゴル大学の名称は、現在WEB上に未掲載なので合格する確率は高いという情報提供があった。

《民族学・社会学学院での意見交換（11月14日）》

同学院は、2007年6月25日創立で、以前別教育組織に属していた専攻を改組したもの。専攻系は、民族学系と社会学系の2系統で、後者にはさらに社会学・社会工（サービス）が属している。学生構成は、前者が100%モンゴル族、後者は98%漢族。学部学士課程4学年で合計600名程度。2009年より社会学系にモンゴル族クラスを設置す

る計画がある。教員数はそれぞれ、11名、12名。民族学系教員は1名（回族）を除き全てモンゴル族。修士課程では、応用人類学、民族発展をテーマに選ぶ傾向があるという。国家内56民族の特徴を研究、統合していくのが目的。同院長はボン大学哲学博士で、その他同席した4名の教員は全員日本の大学での博士号取得者。面談後に、資料室の見学。最近他界した同学院副院長の蔵書が並べられていた。年末に新キャンパスに移転予定で、さらにスペースは充実する予定とか。またUnduruna氏指導による学生による出身地民族学的調査ノート（モンゴル文字による）コピーがあり貴重な資料蓄積を行っている。また同学院事務トップは研究者。待遇は院長・副院長クラスであり、研究者の事務職への抜擢は、広島大学の今後の人事計画の参考になるかもしれない。



国外調査 d. ベトナム*

留学生センター長 浮田 三郎

*「広島大学における秋季入学制度に関する調査報告書」からの抜粋

1. ベトナム高等教育の概要

ベトナムでは、5年間の初等教育（義務教育）4年間の前期中等教育、3年間の後期中等教育の後、高等教育へと続く。大学はハノイとホーチミン市にある2つの国家大学のほか、国立大学として地方総合大学、専門大学、公開大学が全部で79大学あり、私立大学は25大学がある^[1]。国家大学は政府直轄の機関であり、傘下に自然科学大学や社会人文科学大学、外国語大学（ハノイ）や工科大学（ホーチミン市）などがある。修学年限は学士課程4年（工学部は5年、医学部は6年）大学院修士課程2年、博士課程3年。教育年度は9月～6月である^[2]。

2. 調査内容

《ベトナム国家大学外国語大学訪問》

（大学概要）

ベトナム国家大学の傘下の大学の一つで、日本語日本文化学科のある東洋言語文化学部を始め9学部、5専攻、4センターを有する。教職員数667名（うち教員548名）、学部生4403名（フルタイム）、大学院生710名である。（データ：<http://www.vnu.edu.vn/en/>）

・本大学は、通訳・翻訳者の育成、外国語の教員養成を担っている。日本語は中等教育での外国語科目（英・仏・露・中・日）の一つであるが、ほとんどの中等教育機関では英語が選択されている。

・日本語日本文化学科の学生は一学年約55人（英語は約500名）、教員は27名（うち日本人は5名）。以前は国際交流基金、JICA青年海外協力隊やシニア海外ボランティアが派遣されていた。

（日本への留学について）

- ・日本への留学は、条件が厳しい。入学試験で日本語能力テストが1級を課されると大変難しい。外国語大学では2級相当を目指している。
- ・日本留学を奨励する上での障害は、留学経費と言語であろう。学費免除

があればいい。

- ・英語で受入れられれば、外国語大学からの日本留学も多くなると思われる。
- ・学生が日本語を学ぶ理由は、日本文化を学びたいというのが最も多い。
- ・ベトナムでの日系企業に90%が就職しているが、数年で辞める割合が高い。給与は生涯賃金でいえば決して高くはなく、また昇進できないシステムなど課題もある。

（国際交流について）

- ・外国語大学からの主な海外留学先は、シンガポール、米国、豪州が挙げられる。
- ・国家大学レベルでの協定の締結もあるが、国家大学は管理部みたいなものであるため、実質的には（傘下の）各大学との協定となる。
- ・外国語大学では、言語を学ぶだけではなく、その地域のコンテクストを学べるような大学にしていきたいと考えている。特にベトナム語だけでなくベトナム文化を学びたいという日本人の教員や学生がいれば、受け入れていきたい。

【日本語学生との交流】

（動機、関心や日本への留学について）

- ・日本のアニメ（ドラえもん）などに興味がある / 日本の踊り（よさこいダンス）に興味があ



学生との交流（黒板前は、通訳のHue氏（左）、Ngo学科長（右）

る / 日本語を勉強して日本の企業に就職したい / とても楽しい / 文法など難しいが、楽しい / 先生の教え方が丁寧で優しい / 広島については、(太平洋戦争のこと) 知っている / 奨学金があれば嬉しい。

《フォンドン大学訪問》

ベトナム最古参の私立大学(1994年設立)。教育訓練省(MOET)が管轄。外国語学部(Department of Foreign Languages)、行政・経済学部(Department of Administration and Economics)、工学部(Department of Engineering and Technology)の3学部(いずれもDepartmentであるが)を有する。学生数は約8000人、専任教職員が252名、非常勤教職員は約300人(聞き取りによる)。ハノイ郊外に2つのキャンパスを持つ。外国語学部の日本語教育はベトナム国家大学外国語大学とともに定評がある。

(日本への留学について)

- ・日本への留学する希望者は多いが、日本の物価は高いのがネックになっている。学費免除や奨学金など支援があればいい。
- ・海外の他の国では、アルバイトをしながら勉強することができる。日本ではアルバイトには制限があるため、生活費での支援があればいい。
- ・大学として日本語を学ぶ学生には、日系の企業に就職してもらいたい。

(国際交流について)

- ・毎年豪州、米国、中国、露、仏、日本、韓国、シンガポールなどと交流を行っている。
- ・中国の大学と相互に交流を行っており、中国からの学生を受け入れるとともに、フォンドンの学生も私費だが中国に行っている。
- ・電気電子学科では、日本語を学ぶ5クラスがあり、30人ほど技術研修として大阪の電子機械の企業に派遣している。
- ・2002年(平成14年)に「ベトナム語学」の教育がベトナム教育訓練省に承認され、ベトナム語学を学びたい海外の学生の受け入れや教員の交流を図っている。

(日本語教育について)

- ・日本語学科からは毎年約150名が大学を卒業している。
- ・日本語はベトナムで人気が高い。

しかし日本語の教員は足りていない状況。

- ・フォンドン大学でもここ3年で1クラス(30人)が3クラス(90人)に増加するなど、日本語の需要が高まっており、日本語を強化しようと考えているが、教員の人数が足りず、日本の大学の大学院生でも短期でいいので、日本語を教えに来てもらいたい。

3.まとめ

ベトナムの高等教育機関における日本語教育事情として、日本語を学ぶ学生の日本語レベル(概ね学部生では3級程度)を把握するとともに、日本語教育の需要が高くなっている割に日本語教員が量的に不足しており、その強化が望まれていることが分かった。

日本への留学ニーズについては、日本文化への強い関心と日系企業への就職希望がある一方で、日本への留学は経済的な課題があることを再認識した。印象であるが、日本語の学生は短期留学への志向が高いのではないかと思われた。

参考文献

- [1] ベトナム教育訓練省2006年レポート。ゴ・ミン・トゥイ「国家レベルの言語政策の動向 - 日本語の位置づけ ベトナムのケース」。
- [2] 独立行政法人日本学生支援機構『海外留学ハンドブック(ベトナム)』2006年3月。



フォンドン大学 (Phuong Dong University)

2. 地域オフィス活動

地域オフィスの活動状況について

上田才 節 雄

本学では、大阪と福岡に入学センター地域オフィスを設置している。各オフィスでは「アドミッションカウンセラー」という名称の担当者等で入試広報活動の業務を担当している。

主な業務は、本学の内容や入試についての質問や相談で訪れるオフィス来訪者、電話等での問い合わせ者への対応、そして、本学への受験者が多い高等学校の先生方を訪ねる高校訪問である。

本学の入試内容等の案内や、研究内容などのトピックス的な情報を提供するとともに、本学の内容・入試の在り方などについて意見をいただけるなど、大学と高等学校を繋ぐ有効な機会となっている。

本学の合格者を平成20年度入試で地域別に見てみると、広島県内合格者が30.4%を占め、九州地区から23.2%、以下、広島県以外の中国から16.1%、近畿10.6%、四国11.3%、東海4.4%となっている。同じく入学者を県別にみると、広島県出身755名。次に福岡県161名。以下、兵庫県152名、山口県144名、愛媛県135名、岡山県132名の順となって

おり、受験生は広く西日本エリアから本学を目指している状況である。このような地域別出身構成は以前から続いており、特に大阪と福岡は優秀な受験生を継続的に迎え入れるための拠点としても重視してきた。さらに、18歳人口の減少や近年の経済状況による受験生の地元志向など、厳しい状況下で、各オフィスの果たす役割はますます重要となっている。

今後の展開としては、これまで形成してきた地区での基盤、特に高等学校との繋がりをまず大きなパイプにしていくことが必要であると考えている。高等学校での入試説明会や相談会の機会に出身高校のOB・OG在生が参加し、大学の内容や学生生活などの具体的な紹介、受験生が気軽に質問できる関係などの提供。オフィスでの相談に本学の教員や学生が参加する形態の相談会の実施など、積極的な提案が各オフィス担当者から出されている。また、地域での説明会の機会を増やすことも併せて具体的に検討を行う予定である。

入学センター地域オフィスの概要

| | | 入学センター大阪オフィス | 入学センター福岡オフィス |
|--------|----|---|--|
| 所在地等 | | ・平成17年12月開設 北区中之島4-3-53 大阪大学中之島センター5F 〒530-0005 TEL 06-6444-2112 | ・平成18年6月開設 福岡市博多区博多駅中央街8-36 博多ビル8F 〒812-0012 TEL 092-432-5233 |
| 開室日・時間 | | 毎週月・火・水・木・金曜日（祝日は閉室） 10:30～17:30 | 毎週火・水・木・金・土曜日（祝日は閉室） 11:00～18:00 |
| 担当人員 | 教員 | 1名（アドミッションカウンセラー） | 1名（アドミッションカウンセラー） |
| | 職員 | 1名 | - |
| 主な活動内容 | | ・高等学校等への訪問 ・各種説明会等の広報と実施 ・来訪者の質問・相談などの対応 ・電話等の問い合わせ対応 | |

平成21年2月現在。

3. 入学センター学生スタッフ活動

はじめに

永田 純一

大学説明会やオープンキャンパス等において、大学の概要や学部の教育・研究に関する説明や高校生や保護者からの相談対応に、本学の学部・大学院学生が学生スタッフとして積極的に参加している。本年度は、より広く活躍できるよう新しい取り組みを行った。以下に本年度の学生スタッフの活動内容を紹介したい。

(1) 母校訪問

本学在学生在が、母校を訪問し、本学を目指す後輩の相談に対応するものである。本年度は西日本の高等学校5校へ計9名の在学生在が母校を訪問した。学年全体へのスピーチや、放課後の時間を利用した相談を設定していただくなど、訪問させていただいた高等学校には大変なご協力をいただいた。参加した学生スタッフも、自らの進学動機などを振り返ることができてとても有意義だったと感想を述べている。

(2) 大学説明会

本学主催の大学説明会を、平成20年度は西日本10都市で開催した。すべての会場において、学生スタッフが受付、スピーチ、さらに受験生、保護者の方からの相談対応を行い、大変好評であった。スピーチにパソコンでスライドを利用したのももあり、学生同士の刺激にもなったようである。

(3) 高校訪問

母校訪問とは異なり、本学教員が高等学校で模擬授業を実施する際、学生スタッフが実際の学生生活の様子を伝えるため、スピーチを担当した。教員による授業との組み合わせにより、より魅力的な模擬授業を目指したいと考えている。

(4) 大学訪問

本学には、中国・四国地方を中心に、多くの高等学校から大学訪問を受け入れている。昨年ま

では、教員だけで対応していたが、本年度は、参加可能な学生スタッフの協力により、在学生によるスピーチや相談対応を実施した。

(5) 進学フォーラム(大阪、福岡)

学生スタッフが大学説明会等で経験したさまざまな相談対応の中で、受験生が何をもちとも疑問に思い、どんな情報を得たいのか、といったことをもとに、在学生と高校生との自由なディスカッションの場として、進学フォーラムを開催した。参加者は少数であったが、参加した高校生からは、日頃疑問に思っていたことについて、じっくり話が聞けた、と良い印象を持っていただいた。

平成21年度も、これまで述べてきた学生スタッフの活動を、継続してさらに発展させていきたいと考えている。次ページから2名の学生スタッフが、今年経験したことについて、感想を述べているので、ご一読いただければ幸いである。



僕は広大生 ～ 当たり前前のことを再認識した1年間～

総合科学部総合科学科 1年 山谷 義貴

2007年7月21日。高校3年生だった私は、地元山口県で開かれた「広島大学説明会」に参加しました。私が広島大学に関心を持ったのが高校3年生の1学期だったので、自分の中では、「それから先、いかに受験勉強を前向きに続けていけるかどうかを決める」と言っても過言ではない、とても重要な説明会だったわけです。当日は、入学センターの先生のお話を聞いて広島大学に関する知識を得たり、学生スタッフの先輩のスピーチで大学生活というものを身近に感じたりすることで、「広島大学に行きたい」という思いはより強いものとなりました。さらに、それまでは考えてもいなかったAO選抜に興味を持ったのもこの説明会がきっかけでした。このあと私はAO選抜の受験を決意し、夏休みが明けてから本格的に対策を始めます。そして、AO選抜の受験まで常に受験勉強に対する意欲を保つことができ、2007年12月7日に総合科学部総合科学科に合格しました。このように、私の進路選択において、「広島大学説明会」や「学生スタッフの先輩」の存在はとても大きなものでした。

そんな私ですから、学生スタッフ募集の連絡を見て、即座に「やるしかない!!」と思いました。そして、広島大学説明会（岡山会場・松江会場・山口会場）、中国・四国地区国立大学合同入試説明会（高松会場）、広大生による進学フォーラム（福岡会場）に出向いたり、スチューデントアドミッションカウンセラー事業（母校訪問）で山口県立萩高等学校を訪問したりと、かなり多くの経験をすることができました。

ところで、冒頭でご紹介した私の受験期について、皆さんはどのような印象をお持ちでしょうか。私自身は、とても学生スタッフとして受験生の前で語れるようなものではないと思っています。広島大学に関心を持ったのは高校3年生になってから。AO選抜の対策を始めたのは夏休みが明けてから。もっと早くから広島大学に関心を持ち、もっと早くからAO選抜の対策を頑張っている受験生は、きっとたくさんいるはず。しかし私は、スピーチの機会があれば、時間の許す限り、受験

期の様子も交えて話すようにしています。そして、こう結ぶのです。「僕が広島大学の受験を決意したのが高3の7月。AO選抜の受験を決意したのが8月。それからでも合格できた。今からならまだ遅くない。辛い時も、諦めないで頑張してほしい。」

そんな私のスピーチが受験生たちにどの程度の印象を与えているのかはわかりませんが、嬉しいことに、AO選抜についてや総合科学部についてなど、質問や相談に来てくれる受験生が毎回少なからずいます。中には、「私も総合科学部のAO選抜を受けるんです」と言って相談にやってきて、私のアドバイスをメモして帰ってくれる人もいました。また、この夏休みの模試で初めて志望校を書くという高校2年生で、「もし判定が悪かったら、志望校を変えた方がいいんでしょうか」と質問してきた人もいました。つい、数年前の私自身と重ね合わせて懐かしい気持ちになってしまいます。そんな感慨にふけりつつ、真剣に質問や相談に応じています。それで安心してくれる受験生の顔を見るたびに、学生スタッフの仕事は本当にやりがいがあって楽しいものだと感じるとともに、自分の回答が受験生たちの将来にいくらかの影響を与えるのだと思うと、責任を感じます。

この1年間、学生スタッフの仕事をする中で、「自分は広大生なのだ（総合科学部生なのだ、AO選抜入学生なのだ）」という思いを新たにし、自信や誇りを持つことができました。出向いた先で出会った受験生たちにも、志望どおりに広島大学に合格し、ゆくゆくは「自分は広大生なのだ」という自信や誇りを持ってもらうことができたなら、こんなに嬉しいことはありません。

3. 入学センター学生スタッフ活動

入学センター学生スタッフの活動を通じて高校生に伝えたいこと

教育学部第二類(科学文化教育系)社会系コース 1年 森 玲 薫

私は1年生の夏から、入学センターの学生スタッフをしています。これまで大学説明会の学生スタッフとして高松・長崎・大阪会場を担当し、さらに今年度初めての企画となる、現役広大生による母校訪問(スチューデント・アドミッションオフィス事業)にも参加させていただきました。これらの場所ではたくさんの高校生たちと出会いましたが、彼ら・彼女らとの出会いは私自身に大きな影響を今も与え続けています。

大学説明会での個別相談会等において、広大での大学生活を夢見て切磋琢磨している高校生たちの不安や疑問をよく耳にしましたが、私がほんの1年前まで高校生をしていたので彼らの心の内はよく理解できますし、自分自身もそう考えていたので懐かしくも思います。しかし自分が大学生という立場になってから高校生の生の意見に触れると、また見方が変わり、とても新鮮な気分になります。大学生から見ればこんな小さいことで悩んでいるんだなあと思うこともありますが、高校生は今その悩みと真剣に向き合っていることがよく分かります。私が学生スタッフとして彼らにできることは、彼らのやる気を最大限引き出すことです。受験に対するモチベーション向上の手助けということです。どうしてこういったことをしたいと思うのか、それは私も高校生の時に同じように広大の大学説明会で現役の先輩方と接して広大に合格したいという想いをより一層強くしたからです。そして自分が大学生になった今、毎日がとても充実しているからです。だからこそ高校生に伝えたいこともたくさんあります。

大勢の高校生を前に5分から10分程のスピーチをする時に、私は自分の受験期の勉強方法や使用した参考書の話はほとんどしません。高校生が大学生に一番聞きたいのはきっとそこなのだろうとは思いますが、あえて触れません。それは、特に今「受験生」として毎日受験勉強におわれている高校生に対して、勉強だけで終わる高校生活にしてほしくないからです。たった3年間しかない高校時代にしかできない経験を彼らにはたくさん積んでほしいからです。そもそも大学説明会にわざわざ

わざわざ足を運ぶくらいですから、受験に対する不安があるにせよ、勉強の仕方がわからないにせよ、やる気だけは失っていない証拠です。だからこそそんな彼らに私が少しでも印象に残る話をして、その話を記憶に留めて帰ってほしいそしてさらに彼らの高校生活に活かしてほしいと思い、ありきたりな勉強方法などの話は持ちださないのです。どこの会場に訪問した時も私は必ず、「親」「学校の先生方(特に担任)」「クラスメート」の存在なくして受験には臨めないこと、だからこそこれらの人たちに特に感謝する受験期であってほしいということを伝えます。その時の高校生たちの私をじっと見つめる姿に私も毎度嬉しくなります。「私は大学時代にこういうことをした」と胸を張って言えることが何かひとつほしいと入学当初から考えていたので、自分にとっての経験値を上げるという意味で始めた学生スタッフですが、今は自分のためというより広大を目指す高校生たちのためにこの活動をやっているのだと心底思っています。大学説明会で出会ったたくさんの高校生たちと広大のキャンパスでお互い大学生として会えることを今から心待ちにしています。

入学センター活動レポート

広島大学AO選抜

全学による実施体制として今年で3年目となったAO選抜は、総合評価方式（募集人員289人）に931人が志願し、235人が合格した。一方、対象別評価方式では、志願者数は8人（帰国生選抜）、46人（社会人選抜）に対し、それぞれ4人（帰国生選抜）、26人（社会人選抜）が合格した。フェニックス方式は20人の志願者に対して、合格者11人となった。

大学訪問・模擬授業

大学訪問は、直接本学キャンパスへ受験生等が来学し、本学の学部学科等の専門領域に関する講義や設備見学、在学生との対話などを通じて、本学の教育・研究に直接触れる機会を提供するねらいを持っている。さらに、入学センター教員による大学進学指導としての講義も実施している。平成20年度は、広島県内から24校、県外から3校の訪問があり、延べ100コマの講義が実施された。模擬授業は、各地の高校等へ本学教員が出向いて授業を行うもので、平成20年度は広島県内28校、県外11校で実施された。

オープンキャンパス

今年度は8月7日・8日にオープンキャンパスが開催され、天候にも恵まれ、過去最高の13,229人（1日目7,998人、2日目5,231人）の参加があった。多くの高校生、その他保護者の方や高校教員、さらに中学生のみなさん等にもご参加いただいた。学部別参加者数の内訳は表1のようになった。

入試説明会・大学説明会

平成20年5月に西日本10カ所で高校教員を主な対象とした入試説明会を実施し、計355人の参加があった。また、本学主催で受験生・高校生・保護者・高校教員等を対象にした「広島大学説明会」を6月から8月の期間、西日本各地の計10会場で実施した。今年は、入学センター学生スタッフとして登録した学生が主体的に参加し、大学・学部選びのポイント、将来の夢などをスライドを用いたプレゼンを通して受験生や保護者に語りかけ、参加者から高い評価を得た。学生スタッフは、大学説明会以外でも大学訪問や高校訪問においても大変活躍しており、今後より一層活動の場を広げ



表1 平成20年度オープンキャンパス実施状況

| 学部等 | 平成20年度 | | |
|---------|--------|-------|--------|
| | 8/7 | 8/8 | 計 |
| 総合科学部 | 486 | 360 | 846 |
| 文学部 | 590 | 507 | 1,097 |
| 教育学部 | 1,737 | 1,411 | 3,148 |
| 法学部 | 468 | 286 | 754 |
| 経済学部 | 545 | 362 | 907 |
| 理学部 | 640 | 530 | 1,170 |
| 医学部 | 833 | 227 | 1,060 |
| 歯学部 | 94 | 90 | 184 |
| 薬学部 | 730 | 185 | 915 |
| 工学部 | 1,093 | 622 | 1,715 |
| 生物生産学部 | 294 | 262 | 556 |
| 入学センター等 | 488 | 389 | 877 |
| 計 | 7,998 | 5,231 | 13,229 |

表2 平成20年度広島大学説明会実施状況

| 会場 | 実施日・場所 | 参加者数 |
|-------|---------------|------|
| 広島会場 | 6/22(日) 広島市 | 682 |
| 岡山会場 | 7/5(土) 岡山市 | 68 |
| 福山会場 | 7/6(日) 福山市 | 82 |
| 松江会場 | 7/6(日) 松江市 | 107 |
| 福岡会場 | 7/20(日) 福岡市 | 244 |
| 高松会場 | 7/21(月・祝) 高松市 | 256 |
| 北九州会場 | 7/26(土) 北九州市 | 52 |
| 神戸会場 | 7/27(日) 神戸市 | 131 |
| 山口会場 | 8/2(土) 山口市 | 59 |
| 松山会場 | 8/3(日) 松山市 | 79 |

ていきたい。表2に各会場の参加者数を示す。また、11月には、初めて東海地方の名古屋市で、中国地区の国立大学合同説明会を実施し、入学センター学生スタッフも参加した。他大学の学生との交流を行うなど、今後、より発展した内容が期待される。

入学センタースタッフ

平成20年度広島大学入学センターの教職員を紹介します。
(平成21年3月5日現在)

杉原 敏彦 (センター長・教授)
上田才節雄 (准教授)
高地 秀明 (准教授)
永田 純一 (准教授)

【入試グループ】

為石 勝美 (入試グループリーダー)
三宅 孝 (専門員)
田中 克英 (主査、センター試験・大学院担当)
山本 正和 (主査、個別学力検査・編入学担当)
玉井 浩二 (主査、広報・AO選抜担当)
玉田 寛 (主任、試験実施電算担当)
鈴木 章子 (事務員)
田中小百合 (事務員)
澤山 理奈 (事務員)

【大阪オフィス】

井場 宏晃 (アドミッションカウンセラー・客員教授)
中田 安紀 (事務員)

【福岡オフィス】

瓜生 雄一 (アドミッションカウンセラー・客員教授)

編集後記

今回は、秋季入学を話題として取り上げました。大学に関する議論が近年大変盛んなものとなっています。受験生と最初に向かいあう立場にある入学センターの役割をしっかりと果たしていきたいと思います。

広島大学入学センター年報 第7号

平成21年3月31日

編集：広島大学入学センター年報編集委員会

編集委員 杉原 敏彦 / 上田才節雄 / 高地 秀明 /
永田 純一

発行：広島大学入学センター

印刷：大東印刷株式会社

電話(0848)62-3389 FAX(0848)62-3399